

第3回ウィズあかし運営委員会
「市民みんなでつくるウィズあかしを考える会議」議事録

令和3年5月27日（木）18:00～20:00

複合型交流拠点ウィズあかし活動スペースA・B

参加者：運営委員 9 名 明石コミュニティ創造協会スタッフ 15 名 市職員 1 名

1. あいさつ（事務局）
2. 前回の運営委員会の振り返り
事務局より前回の運営委員会の振り返りを行った。（別添資料参照）
3. 大阪府立大学大学院 武田准教授より「市民の暮らしにとっての公共空間」をテーマにご講義いただきました。

4. 意見交換および全体共有

各ペアで意見交換を行い、下記の意見が出されました。

【テーマ：武田先生への質問】

- 共同（コモン）はコモンズと同じ意味なのか。
→コモンズは共有財という意味であり、語源や意味は同じである。
- 地域で共同はどのようにすればいいのか。（どのような活動が適しているのか？具体的に）
→日本は昔から共同体の文化が根強くあり、それが近代になって破壊され、効率化や公平性を保つことに重視するようになった。地域一丸となってコラボレーションするより、もっと気楽に個人の生活が許されるぐらいゆるい程度で、今のコロナ禍において、地域が共同してもいいという場を作ることが大切である。
- オーバーレイの意味は。環境のオーバーレイと時間のオーバーレイをもう少し教えてほしい。
→オーバーレイはたくさんの層で分け、合わせて評価する手法である。環境のオーバーレイは、工場や高速道路を作るため極力環境に影響が少ない場所を選び、生み出すために編み出された手法である。時間のオーバーレイは、過去の変化をオーバーレイにすることであるべき姿の方向性を判断する手法である。
- コロナ禍での距離感を保ちながら、市民に寄り添った自治体の具体的な事例は。
→具体的な自治体は思いつかない。公園の遊具にテープをグルグル巻きにして、子どもたちに使わせないようにしている事例もある。コミュニケーションの取り方が上手い下手の自治体はある。

- 公園や建物を管理する者が評価する指標として、利用者や利用率を基に評価しているものが多い。これからの時代、新しい評価の指標を生み出していけないといけない中、面白い事例があれば教えてほしい。
- 公園の評価の話にもなるが、高槻市の指定管理者は「公園があることで、高槻市にどんないい影響があるのか」や「公園があることで、あなたの暮らしにいい影響はあるのか」という質問項目を入れている。それは公園の中の評価だけではなく、波及効果も図ろうとしているものである。
- プロセスの評価について、事例があれば教えてください。
- 評価軸の話はスタッフにとって大変参考になるが、どういう視点で評価すればいいのか教えてほしい。
- 現状はアウトプット評価が多く、こういう成果が出たという評価ではなく、途中段階でこんなことをやってきたという評価に実は意味である。同じものができるにしても、そこに至るプロセスには違いがあり、スタッフが企画立案してすべて作ったのか、または立案段階から市民を巻き込んで一緒に作ったのかなど。プロセスに関わった人の数やそこで生まれたコミュニケーションなどに違いがある中、どこの施設においてもそういった部分の評価は行っていない。その部分を丁寧に評価していくことが大事であるので、ウィズあかしでは是非取り組んでほしい。
- ウィズあかしのことを西部の人にも知ってもらうには？
- 光景と情景という2つの方法がある中、光景の方法でするのはどうか。西部に住んでいる人にもウィズあかしの見せる機会を作る、出張で行くのもひとつであるが、ウィズあかしのことを強く印象付ける西部地区限定のイベント開催がひとつである。あとは、情景の方法で日常生活の中に口コミなどでじわじわと浸透させるなど、具体的なやり方までは思いつかないが、光景と情景の2つをうまく組み合わせることが大事である。

【テーマ：これからのウィズあかしについて感じたこと】

地域、世代への PR

- 地域の事を聞いて、地域に合せた取り組みが欲しい。
- 地域との窓口若い力を。
- 世代を交えた交流への力添え。
- 若い人たちの受入れ、そのアプローチや運営へのアプローチを力強く、出向いて
- 駅など人目につきやすい場所にウィズあかしの広報をアピール！
- 若い世代にもっとウィズあかしを知ってほしい。
- 第1回、第2回のみんなからの意見をより深める議論はどうですか。
- どうすればゲストからホストになってくれるのか。(何に幸せを感じるか。ある程度余裕が必要。お金の換算できればよいのでは？)

関わる人々の気持ち

- フリースペースで共同から協働へ
- 余白が大切→自由度が高い、何にでも必要
- 決めすぎない、ラストワンマイル、受益者しだい

評価、実験

- 実験って大切だ。いつも予算がネックになる。
- おこしたい変化 例えばコミセンを若い世代に利用してもらおう。実験的にウイズあかしがいろんな事業をして、成功を行政がひろえばいいのでは！
- みなさんの（ウイズあかし）評価軸を創ってみては？それを共有して“あかしモデル”による満足度をみては？
- 事業計画→作ったあと誰が利用するのか、その先の目的が大切

5. まとめ

講評として、識者のお立場から2人の委員にご意見をいただきました

(委員)

コロナが発生した時は大変なことになったが、潜在的な問題が浮上し、大きく世の中が変わる、変えられる一つの機会になると考えていた。

しかし、コロナ慣れする状況を見ると、コロナが収まった後、変わったことが元に戻ってしまって、この程度で済んだと捉えて潜在していた問題に覆い被すように埋める動きが出てくるのではと思っている。

私たちは事業を進める中で、3つの「しん」を大切にしている。

一つ目は、「新」コロナ禍ではできないため、新しいやり方を考えてやっていく

二つ目は、「心」どんな時でも心を通わせたり、どんな方法でも寄り添うことが必要

三つ目は、「真」本物をしっかりと見据えること、慌ただしい中でも大事な真を忘れない。

みなさんの潜在力はすごいと思っているので、指定管理で評価を提出する際は、単純な数値的な評価軸ではなく、行政から出される仕様書に捉われない、みなさんで敷き詰めた評価軸を出していただければと思う。

(委員)

みなさんの話を聞くと、若い世代へのアピールが必要という印象を受ける。公園もそうであり、子どもやその親世代、中高年は利用するが、若者世代は使わないために、利用するためにはどうすればいいのかという話になる。公園以外に興味があればそれでもいいのではと思う。ウイズあかし以外に興味があるものがあるのであれば、若者はそれで健全であるという気がする。無理やりでも来てもらわないといけないかどうかは考えてもいい。

ただ、若者が本当に行き場をなくして、どこにも行けない社会であるのであれば、逆にそれは問題である。ウイズあかしができることもあると思うし、やらないほうがいいこともあると思う。

このコロナ禍で変わったことは、オンラインがすごく増えたと感じる。学会や委員会で東京まで新幹線で往復していたのが一切乗らなくなり、時間的な価値を生んでいるような気もする。

一方で、会わないとできないコミュニケーションもたくさんあると感じており、ZOOMが始まってから、個人的な一対一での立ち話がなくなった気がする。逆にオンラインによって、行きづらかったところに行けたり、海外へ行った卒業生とやり取りできたりと、コミュニケーションの幅が広がったとも取れるし、狭まっているところもあるとも取れる。ウィズあかしとして、オンラインでの可能性とオンラインでは果たせないことの魅力を出していく、その方法の一つあると思う。

コロナ禍で公園がどう変わるのかとよく聞かれるが、変わらないものの価値も一方である。コロナにより急に公園が変わってしまうと、それはそれで価値がなくなってしまう気がする。変わらないずっとここにあるものが公園であり、ひょっとしたらウィズあかしもそういう場所なのかもしれない。元に戻るだけがいいわけではなく、新しい改革をするのもいいとも言えない、答えがある話ではなく、どちらがいいのかは、ゆくゆく考えながら進めていただければと思う。

(事務局)

今回、ご意見いただいた内容や武田先生の講義を踏まえて、ウィズあかしに対していろいろ思うところはあると思うが、次回の運営委員会の場として、また次回のご案内をさせていただくので、その時は皆さんともっと議論できればと思います。

以上